熊本大学学術リポジトリ

旭光 ： 新體詩 ： 文苑

著者	天山
雑誌名	龍南會雑誌
巻	１０５
ページ	２７-２８
発行年	1904-03-13
その他の言語のタイトル	旭光 ： 新体詩 ： 文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/5669

想ふ、十年の昔、橋上の渠とわれは恐らくば運命の分水嶺に立つてゐたのであらう!!『をはり』

新體詩

旭光

たとへばそれよう ら若き
母の乳房をだきしめて
ちの香に醉へる子の瞳
靜に夢に入るがごと

寂しき光冲の上に
やゝに消ゆゆく星の影
またさめ出でひあけぼのゝ
樂しき光もだしつゝ

はてなき空ゆ流れては
いまし下界の岸うちて
無限をさとす浪の音に
朝の聲のこもるかな

天山

見よ海原の深綠
戀の光の燃ゆそめし
崇高き聖の御胸や
五彩色ぞるあやのかげ

北にめぐれる紅は
春の夜の夢南は
迷の色のこむらさき
こやみゆそめし裾模樣

きびしくされど聲もなき
みてとかしてみ夜の魔は
暗と眠と西のそら
諸共領をひきしんぬ

ゆけるをはふる喜か
くるを迎ふか地のさけび
汀の波をすべりさて
ゆるくあしたの鐘響く

よそおひ成りぬ雲錦の
波はひびいて朝の聲
海のをちなる御都
みくるま早も整へり

あら幾すじの征矢とびぬ
けらくの色を世に投げて
浪ちのはてをゆるやかに
見よ火の車きしりゆく

綾のもずろを射貫いだる
白銀のそやたばさみて
こがねのかむり嚴しき
朝のみ神卿がすや

二十八

空に轟く迅雷の
響はろれよあらずとも
生命教ふる御聲は
波に野山にあふれたり

夕の響衰へて
底に沈みし潮のねよ
いざやさんごの床出で〻
望の聲に湧きかへれ

岸に淋しき並木松
凉しき朝の風たて〻
雲のみもずろ吹きなびけ
不斷の緒琴かなでやや

聲なき教身にひめて
汀に朝の息すへば
胸に驕慢手に力
わがき血潮のおどるかな

（寅年夏、虹の松原にて）